第11幕 ウィーン体制—自由の抑圧

会議は踊る

フランスを中心とする一連の戦争は、全ヨーロッパを巻き込む国際戦争となりました。1814年、この乱れた国際秩序を再建するため、各国代表が集まってウィーン会議が開かれます（図31）。

会議の中心となったのは、フランス革命後の世界に大きな不安を感じていたオーストリアでした。フランス革命によって打ち立てられたナショナリズムが高まることは、オーストリアという帝国にとっては大きな脅威でした。オーストリアは多民族国家であり、国内には多くの異民族を抱えています。国内のナショナリズム（特に民族主義）の高揚は独立運動の生起を意味し、帝国は解体の危機に瀕し

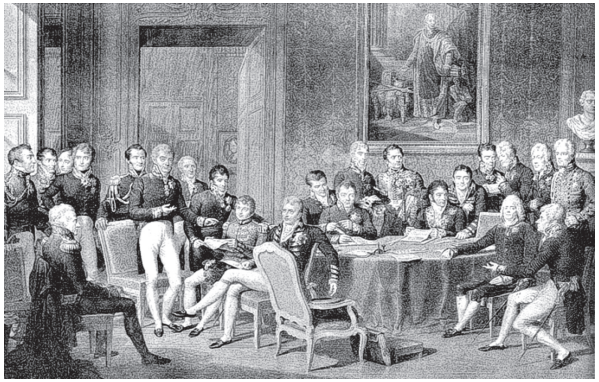


図31：ウィーン会議

本章の内容

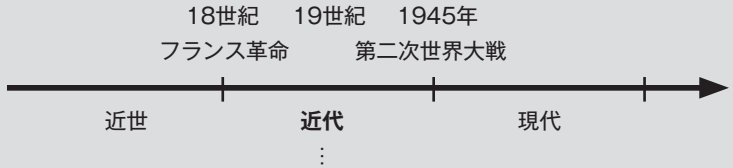
第11幕	ウィーン体制	——自由の抑圧
第12幕	ヨーロッパの完成	——自由の実現
第13幕	アメリカの発展	——建国の神話

フランス革命によって新しい時代の扉が開かれ、ヨーロッパは近代という「自由と平等」の時代に入ります。フランス革命は、新しい体制を築くことはできませんでしたが、新しい概念「自由主義」と「国民意識・民族意識」「国民国家・民族国家」を生み出し、それはナポレオンによって全ヨーロッパにバラまかれていきます。いずれにせよ、個人や民族の自由・平等を求める精神です。しかし、ヨーロッパにはいまだに絶対主義国家が乱立しています。絶対君主は、フランス革命の精神を認めるわけにもいきません。各国君主は協力してこの動きを抑圧しました。ウィーン体制です。

けれども、ウィーン体制は時代の流れに押し崩されていくことになります。個人の自由、民族の独立は認められ、英仏に加えイタリアやドイツが誕生、さらにアメリカの統一も進んで欧米主要国が出そろいます。「近代Ⅰ（自由と平等）」では自由の抑圧の指導者、そして自由の実現に尽力した指導者、つまり建国の指導者に注目していきます。

◉近代

自由と平等の時代。



近代Ⅰ＝自由と平等　ヨーロッパの完成
近代Ⅱ＝侵略と抵抗　ヨーロッパの時代
近代Ⅲ＝戦争と平和　ヨーロッパの時代からアメリカの時代へ

てしまいます。

このオーストリアの外相メッテルニヒ（図32）を中心に、フランスからはタレーラン、イギリスはウェリントン、その他全ヨーロッパ諸国が参加して話し合いが持たれることになりました。オーストリアでなくても、各国君主にとって自由を求める声やナショナリズムの高揚は大きな問題だったのです。

会議は紛糾します。ナポレオンはヨーロッパを散々に荒らしたため、領土の再編成、利害の調整は困難を極めました。「会議は踊る、されど進まず」という言葉にあるように「1日の4分の3はダンスと宴会」であり、話し合いは舞台袖で行われたといいます。しかし、その頃ナポレオンは7隻の船でのエルバ島脱出を準備していたのです。

図32：メッテルニヒ

メッテルニヒとタレーランのつくる時代

この緩慢な空気を凍りつかせたのは「ナポレオン、エルバ島から帰還」の一報でした。諸悪の根源が舞い戻ってきたというのだから事態は一変します（危機）。会議は急遽、妥協に向かい（団結）、ウィーン議定書がまとめられ、各国はナポレオンとの最後の決戦に向かいました（歴史の見方④）。

さて、この決定とともに19世紀前半の国際秩序としてのウィーン体制が樹立されました。体制の方針は次の2点です。

◎勢力均衡

各国が同程度の力を持つようにするべきという主張。

◎正統主義

フランス革命前の主権・領土を正統とし、革命前の状態に戻るべきとする主張。

1点目の勢力均衡は領土変更のための原則であり、「ヨーロッパの平和」のための原則です（歴史の見方⑤）。メッテルニヒの主導によって、主要国のパワーバランスが均衡するよう議定書にまとめられました。

メッテルニヒは、貴族の子として生まれ、フランス革命を憎んでいました。革命後は、反動勢力の象徴として、自由と自立を叫ぶ者を牢獄に投げ込んでいきました。しかし、一方で、彼

は涼しげな目もとに得体の知れない微笑をたたえた美青年でもありました。多くの女性と浮き名を流し、その中には美貌で知られていた宿敵ナポレオンの妹のカトリーヌの名もあります。政治的信念とプライベートは別なのか、ともあれ、自由を実現させるためにはこのメッテルニヒを倒さなければならないということです。

2点目の正統主義は体制変更における原則で、フランス代表のタレーランが主張したものです。しかし、これはちょっと妙な話です。というのは、ウィーン会議は一連の戦争の戦後処理会議です。戦勝国もいれば敗戦国もいるわけで、敗戦国はいわずもがなフランスです。責任を追及されるべきフランスの代表がなぜ「戦後のヨーロッパはこうあるべき」なんてことを主張できるのでしょう。

タレーランは外交の天才と評され、メッテルニヒをして〝鋭利な刃物〟と表現させるほどの狡知をもった人物で、政治的信念よりも権力者との妥協を優先するようないわゆる食えない人物です。タレーランは、ウィーンに到着するや否や、会議においてどう動くべきかをすぐに見抜きました。彼は次のように主張します。

「お待ちください。非難する相手を間違えておられる。私はフランスのブルボン朝の代表としてこの場におります。あなたがたはルイの処刑をお忘れでしょうか？　私どもは皆さんと同じ革命の被害者なのだということをはっきりと申し上げておきましょう。そして、すべては革命の前に戻すべきです」

この一言で会議の方向性は決定しました。そう、彼は革命とナポレオンを悪とし、自らを諸国と同じ被害者とすることで、フランスの戦争責任を葬ってしまったのです。敗戦国が戦勝国に要求を通すなどということはこの限りでしょう。

こうして、ウィーン議定書はまとめられました。革命前に戻すとなれば、あのナポレオンが全ヨーロッパにバラまいた自由主義・ナショナリズム（国民主義・民族主義）も否定することになります。ウィーン体制では、各国がキリスト教の精神を共有した神聖同盟なるものを結び、協力して来たる革命に備えていくことになります。近代は、フランス革命によって蒔かれた種の芽を潰すため、国際的反動体制たるウィーン体制の成立によってスタートしました。

歴史の見方⑨　「ヨーロッパの平和」の問題2

ヨーロッパの人々は、フランス革命とそれに続くナポレオン戦争によって、再び「ヨーロッパの平和」の問題に直面することになりました。

ウィーン会議では、平和の原則として勢力の「均衡」が再確認されます。しかし、それだけでは平和を維持できないことをナポレオンが証明してしまいました。そこで、新しく加えられた平和の原則は、正統主義とキリスト教精神に基づく「協調」です。